

現役女子大生2人と気づいたら同棲していた件について

神崎識

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

21歳の社会人の櫻木拓真は自分が住むマンションの両隣の306号室と308号室に引っ越してきた大学一年生の西住まほと安斎千代美。

部屋が隣同士なので拓真は近所付き合いをしていたが、気づいたら同棲しているお話。

※西住まほはドイツに留学してません。

目次

ただのお隣同志だったのに・・・	1
慣れるって怖いね	5
大学に向けてレッツラゴー!	9
高校時代について語ります!	14

ただのお隣同志だったのに・・・

蟬のうるさい声が鳴き始めていた。

その声で目が覚めた

もう月は7月、今の会社に入社して3年近くになっていた。

今年の4月に入社した社員は研修期間を終了してきた頃だ。

少し気温も暑くなってきており作業着が嫌になるほどだ。

目を覚ました事だし上体を起こそうとするが体が持ち上がらない。

「またか・・・」

自分は少し呆れながら布団を引きはがすとそこには2人の女の子が引っ付いていた。

彼女らは本来、自分の部屋の両隣の306号室と308号室に住んでいる今年近くの大学に入学した西住まほと安斎千代美だ。

彼女らとは多少の付き合いがあったが・・・

気付いてたら同棲していた。

自分でも驚きだが、この現実を受け入れつつある自分が怖い。

なぜこうなったかを振り返ると・・・

～★～

季節は遡る事、春。

4月の出来事だった。

日曜日で仕事も休みでやる事もなく自室で居た時に来客を告げる呼び鈴が鳴った。

休日にアポなしで訪ねてくる奴など居ない自分にとっては不思議な出来事で少し警戒しながらドアを開けた。

するとそこには絶世の美女と一言で表すにはもったいない程の美少女が2人も居た。

「隣の306号室に引っ越してきた西住まほです」

「同じく308号室に引っ越してきた安斎千代美です」

礼儀正しく2人が挨拶してくれた。

この時はまだ礼儀正しい子たちだなぐらいにしか思っていなかった。

「どうも櫻木佑真と言います。立ち話もなんでどうぞ中に入ってください」

社交辞令のように2人を部屋に招き入れた。

「ゆっくりとくつろいでください」

そう言つて台所で粗茶を淹れていると凄い声が聞こえた。

「うおおおー！」

自分は驚きながら急いで戻ると自分の本棚から本を一冊取つて表紙を眺めている安齋さんが居た。

「ど、どうしました？」

「これは今では絶版になった伝説の恋愛漫画！」

そこには昔に興味本位で読んで面白かった恋愛漫画の一卷があった。

「あ、安齋そんなに凄いのか？」

「凄いなんでもんじやないぞ！西住。これは今になってドラマ化されて原作の漫画は昔に絶版になっているからネットでもすごい金額で取引される漫画だ！」

「読みたければどうぞ」

「本当か!？」

安齋さんは西住さんを放置して漫画を読むことに集中している。

自分は苦笑いしながら西住さんと安齋さんの粗茶を用意した。

「どうぞ飲んでください」

「すみません」

自分はふと時計に目をやるともうすぐで正午になりかけていた。

「お昼、用意しましょうか？」

「いえ、そこまでしていただくわけには……」

「そうですか、カレーなんですけどね」

と自分が小さな声でつぶやいた。

「やっぱりいただきます」

と西住さんが一瞬で返事をした。

先程の態度と裏腹に凄い楽しみそうな顔をしていた。

「ハハッ、すぐ用意しますね」

自分は乾いた笑い声で返事をした。
鍋をコンロにかけて昨晚作ったカレーを温め始めた。

カレーは日がたつほどおいしいというけどあれは本当だなと思う。
炊飯器からご飯を皿に盛りつけてカレールーを掛けてスプーンと
セツトで西住さんに渡した。

「どうぞ」

「いただきます」

西住さんはいそいそとカレーを食べ始めた。

「どうですか？」

自分は味の感想を求めた。

「とても美味しいです。これは市販のルーですか？」

「そうです。でもガラムマサラを追加でいれて圧力鍋で長時間煮込んで
いるので普通よりおいしくなっているはずですよ」

西住さんは夢中になって食べており気づいたら皿には米粒一つも
ないように綺麗に食べていた。

「おかわりをもらってもいいですか？」

「いいですよ」

普通ならこんなな美少女がカレーのおかわりを求めてくると幻滅
すると思うが、自分は作ったカレーを幸せそうに食べてくれることに
満足していた。

く★く

時刻は夕方。

あの後、カレーに満足した西住さんは自分とカレーについて語って
いた。

安齋さんは漫画を読むことに集中しすぎて周りが見えていなかった。
た。

「もう夕方ですね。そろそろ帰ります」

西住さんは安齋さんを無理やり漫画から引きはがした

「やめろ西住！もう少しでいいところなのに！」

「安齋、いい加減にしろ」

「また来ていいですから」

「本当か!？」

安齋さんはおとなしくなりそのまま帰路に着こうとしていた。

「西住さんもまた食べに来てくださいいね」

「また来ます」

そう言い残して2人は帰って行った。

そして現在に遡り・・・

く★く

「どうしてこうなった・・・」

自分でもわからないうちに同棲していた。

この状態ではいけないと声で2人を起こした。

「起きろー朝だぞー!」

2人は目をこすりながら起き上がり布団にぺたんと座った。

本来なら別々に寝ているのに毎朝気付いたら一緒に寝ている。

「おはよう。 佑真、今日は絶好のデート日和だな」

西住さんが寝起き早々ともんでもない事を言う。

「そうだな西住。今日は絶好のデート日和だ」

知らぬ間に休日がデートの予定に変えられていた。

本当にどうしてこうなった!

慣れるって怖いね

く307号室く

本来なら307号室は自分の部屋なんだが、何故か今は両隣の現役女子大生二人と同棲している。

彼女らは近くの大学に入学し、このマンションの同じ階の自分の部屋の両隣に引っ越してきた。

最初はただのお隣同士だったけど、いつしか自分の部屋に入り浸るようになっていた。

別に迷惑してるわけではない。

家事も手伝ってくれるし、光熱費も多少は出してくれるのでうれしい。

彼女らは戦車道という競技をしていると聞いた。

高校時代は名のある選手だったらしく大学も戦車道で入ったと聞く。

正直、自分は戦車道の事はよくわからないけどケガをしないのなら安心だ。

その戦車道の名家の西住流の家元の娘の西住まほだと本人から聞いた。

別に自分は驚きもしないし、特別扱いして媚を売るわけでもない。

もう一人の安斎千代美は名古屋から静岡の高校にスカウトされた程の実力があると聞いた。

自分からすると2人はただの女子大生ぐらいにしか思えないけど。

「なあなあ新作の恋愛映画が公開されたんだ。一緒に行かないか？」

「安斎、佑真は私と出かけるんだ。一人で見に行ってくれないか？」

2人は自分を挟んでにらみ合っていた。

「私と映画を見に行くよな！」

「私と出かけるよな！」

自分の腕は二人に引っ張られて滅茶苦茶痛い。

「痛いから放してくれ！」

2人は自分の悲痛の声を聞いて腕を放してくれた。

「どこかに出かけるのはいいが、それ以前に戦車道の練習があるだろう？ 学業を疎かにするようではいけないぞ！」

自分の正論過ぎる反論に返す言葉がなく、固まる2人。

「とりあえず朝食にしよう。その後には言い分は聞くから」

とりあえず朝食をとり、今日の日程を考える事にした。

ちなみに我が家の朝食は日により違う。

今日はパン食だが、ご飯だったり麺類だったり様々だ。

それも千代美のおかげだ。

彼女は戦車道の腕も料理の腕も一流だ。

それに比べるとまほは確かに戦車道の実力は千代美より上だが、家事スキルが全くと言っていいほどない。

だけどそれは最初の話。

今ではかなりうまくなっている。

元から吸収するのがうまいからすぐに何事も出来るようになってる。

だけどどこか抜けている所がある。

たまにミスをするところがギャップを感じる。

千代美は乙女なところがある。

恋愛漫画や恋愛小説など恋愛関係の物が好きでついこの間もTSUKAYAで借りた恋愛物の映画を一緒に見た。

その時まほは寝てしまっていたけど。

まほはこういうのが苦手で千代美とはあまり趣味が合わない。

でも衝突したことはない。

むしろ2人の間に協調性が生まれている。

だからこそこの3人での同棲生活がうまくいっているのかもしれない。

かく言う自分もこの現状はまんざらでもない。

「朝食用意が出来たぞ」

呼ぶ声に自分は反応して回想を終える事にした。

ちなみに今日の朝食の作は千代美である。

トマトのスープ、ミネストローネスープとこんがり焼かれたトース

トとシンプルな物だが味は一級品だ。

今日も朝からとても美味しそうな朝食だ。

「それでは手を合わせて」

自分の合図で2人が手を合わせてかく言う自分も手を合わせた。

『いただきます』

2人と出会うまで休日しか朝食を真剣に作らなつたからこういうちゃんとした朝食を食べれるようになってるのはかなり幸せな事だと思う。

自分で作る朝食より誰かに作ってもらう朝食はとても美味しく感じました。

朝食の種類も多いから味にも飽きない。

「今日は2人ともちゃんと戦車道の練習に行けよ。最近、サボり過ぎだぞ」

「今日に行く。だが来週は予定を空けておいて欲しい」

「そうだな。来週は空けておいてくれ」

「はいはい。わかつた来週は空けておくよ」

とりあえず今日は平穩な休日が得られるようだ。

「ごちそうさま。洗面所は先に使うから着替えておいてくれよ」

「わかつた」

「りよーかい」

流石に同棲しているとはいえお互い下着姿や裸を見られると恥ずかしいから洗面所を交互で使用して、使用している時に着替えるという方法にしている。

今のうちに顔を洗い、歯磨きと髭を剃っておく。

「もういいか?」

洗面所の扉越しに聞いて返答を待った。

「もういいぞ」

千代美の返事が聞こえたので戻る事にした。

そこには最近はおーイッシュな服よりかわいい系の服を着始めたまほといつも通り乙女チックな服を着た千代美がいた。

「それじゃあ行ってくる」

「行ってくるぞ」

「いつてらっしゃい」

こうやって人を見送るのも中々一人暮らしでは経験で来ていなかったが、やはり見送るのも見送られるのもとてもいい事だと思う。

こうして今日も1日が幕を開ける。

彼女たちと一緒に。

大学に向けてレッツラゴー！

何にもない平日の出来事だった。

珍しく平日に仕事が休みで部屋の掃除をしていた時の事だった。

「あつ！お弁当忘れてある・・・」

2人が珍しくお弁当を忘れていた。

「そういえば今日、妙に急いで行っていたな」

大学はもう夏休みに入っていて講義もない。

いつも戦車道の練習はサボったり、遅れたりしても平気そうなのに今日に限っては例外で凄く早くに出かけて行った。

「しようがない届けてやるか」

自分は散歩ついでにお弁当を届ける事にした。

これでも自分はまだ21歳なので私服で大学に入っても怪しまれないと思う。

それに高校を卒業してから就職したから大学というのに少し憧れがある。

大学のキャンパスとはどういう雰囲気かも気になる。

ここから大学まで歩いて行くのに距離がある。

普段、2人は電車を使って通学している。

たまに自分が大学まで送る時もある。

やはり久しぶりにバイクでも乗るか。

自分は車とバイクの二台を所有している。

バイクは中型のバイクで高校時代に自分で金を貯めて乗り回していた愛車だ。

でも社会人になるので乗用車も必要となるので最近では車に乗る方が多い。

だけどたまにバイクも乗らないとエンジンが動かなくなる。

それにバイクで風を感じるの好きだ。

海の香り、街の香り様々なおいを感じることが出来る。

それもバイクの醍醐味だ。

実は自分こう見えてかなりの資格を持っている。

職業上必要な物が多いが最近では2人に戦車の運転免許を取らされた。

他の免許と違い有効期限が『とりあえず今のところ有効』とかなりアバウトだ。

でも一番驚いたのは男でも取れる所だ。

さて急がないとお昼までそう時間はない。

2人分のお弁当を鞆に詰めてマンシヨンの自分の部屋の戸締りをしつかりと行い、階段で下の階まで降りて駐輪場に向かう。

バイクからシートを外し、キーを差し込む。

エンジンをゆつくりと始動させていく。

「さて安全運転で行くか」

ヘルメットをかぶりバイクを走らせた。

く★く

マンシヨンから大学まで約20分程度で着いた。

だが如何せん大学の敷地面積が広い。

そういえばこの大学、戦車道の演習場の広さが全国で数本の指に入る演習場があると聞いたことがある。

とりあえずバイクを駐輪場に止めて演習場に歩いて向かう事にした。

それにしても今日は暑いな。

じりじりと照り付ける太陽に嫌気がさすレベルだ。

それにしても広い。

大学の戦車道の演習場の面積を抜いてもこの広さは凄いな。

完璧に迷子みたいになってしまう自分。

それよりもなんでだろうか？

大学なのにすれ違う人が居ない。

そのせいか誰にも道が聞けない。

「あの、どうかしましたか？」

自分と呼ぶ声に自分は後ろを振り向く。

そこには灰白色の綺麗な長い髪の毛に際立つ赤い服、それに何よりもモデルのような体型に優雅にさす日傘が似合う美女が居た。

見たところ自分と同一年か一歳年上かだろう。

「戦車道をやっている友人がお弁当を忘れたので届けに来たのですか」

「そうですか、演習場はあちらですよ」

親切に演習場のある方を指さしてくれた。

「ありがとうございます。失礼ですけど、貴女も戦車道をやっているのですか?」

「ええ、やっております」

「やはり、そうですか。名のある戦車道の名家のお嬢様のような気がするんですが?」

「ええ、これでも島田流と言う戦車道の名家の人間です」

「大学生で跡取りだとか大変だと思いませんか?」

「えっ!? あ、あのそうですね、やはり重荷を感じる時はあります」

自分は何故か普通の質問をしたのに驚かれた事に違和感を感じた。

「失礼ですけど名前を聞いてよろしいですか」

「あつはい。櫻木佑真です。こちらも名前を聞いてもいいですか?」

「私は島田千代と言います」

島田千代か・・・よし覚えた。

「櫻木さん、私はこの大学の生徒ではないのでたまにしかこつちに来ないので、またこつちに来た時にこの街を案内してくれますか?」

合同練習で別の大学から来ているのだろうか?

そういえばまほと千代美から聞いたことがある。

大学選抜チームと言う全国の大学から優秀な生徒を集めて結成したチームがあると。

ここの演習場は広いからよく利用するのだろう。

だったらここの地理は少しは知っておいた方がいいだろう。

「いいですよ」

「ありがとうございます。これは連絡先です」

小さなメモ用紙に電話番号とメールアドレスが書かれていた。

「登録しておきますね」

「それではもう時間なので、ここでお暇させていただきます」

そう言つて島田さんは去つていた。
不思議で綺麗な人だと思つた。

自分は腕時計で時間を確認した。

時計はもう昼前を針で指していた。

さて行くか。

演習場に少し急ぎ足で向かう事にした。

〜★〜

まほと千代美に演習場の入り口に出てきてもらうように連絡した。
急いで演習場の入り口に向かうと案の定、大学選抜チームのパン
ツアージャケットに身を包んだ2人はもう既に待っていた。

「お待たせ」

「そんなに待つてないぞ」

「それよりもこれをつけろ」

戦車道関係者と書かれた名札を首から掛けてもらった。

「これで大学に居ても怪しまれない」

「どうしてだ？」

「今日は大学戦車道連盟の理事長とその娘が来ていて大学が戦車道
の為に貸し切られていたんだ」

「へえそうなんだ」

「それよりも今日の練習は終わりだから、演習場内の木陰がある丘で
食べないか？」

「いいぞ」

この後、2人と昼食を済ませて昼寝してしまい、それを見た人に勘
違いされた。

〜★〜

〜side 島田千代〜

「お母様、今日は楽しそう」

「そうね。とてもいい日だったからかしらね」

帰り道の私が運転する車の助手席から娘の愛里寿がそう聞いてき
た。

「それよりも愛里寿十。たまには社会勉強の為に電車で行つてみては

どうかしら?」

「考えておきます」

娘ながら少し不愛想に感じるわ。

でも彼に会ったらこの子も変わると思うわ。

この一瞬の出来事により佑真に新しい出会いが生まれたのであつた

side out

高校時代について語ります！

「なあ、佑真の高校はどんな感じだったんだ？」

夜のリラックスタイムでパジャマ姿の眼鏡をかけて少女漫画を読んでいた千代美がそう聞いてきた。

「確かに気になるな。私と安齋の高校時代の事は話したのに佑真には聞いたことがない」

ジグソーパズルをやっていたまほも話に食いついてきた。

「そうだな。フェアじゃないし話すとするか」

スマホゲームをやめて机を中心に座った。

それに見習うように2人は机の中心に座った。

「自分の高校は工業高校で男子と女子の比率が9対1で男子校に近い感じだった」

「それじゃあ在学中はあまり女の子と関わってなかったのか？」

「そうでもない。自分の科は女子が多かった」

自分がそう言うのと千代美はムツとした顔をした。

「勘違いするなよ。多かったとはいえ、男子の方が比率は高いからな」

「本当か？」

「本当だ」

千代美がしつこく聞いてくるのに対してまほは依然無言だ。

「安齋、今が大事だろ？」

「っ！そうだな西住！」

まほの言葉で千代美が何故か納得してくれたようだ。

「部活動についても男子が多いから戦車道はなかったな。でも運動部が多かった。学校も就職率が良いだけで大した特色はなかったな」

自分の通っていた学校は他校と同じで学園艦上であり、学園艦の規模自体はそんなに大きくはなかったが、古き良き学園艦で一時期廃校の危機にあったが、地元民と学校を鼻負してくれる中小企業から中堅企業、大手企業などが反発に協力してくれたおかげで文科省は我が校を廃校にできなかったのだ。

「まあでも高校にいい思い出はないから思い出したくないのが本音だ

けどな」

少し暗めの声で自分は言った。

「す、すまない！思い出したくない事だったのか・・・」

千代美が申し訳なさそうな顔をしていた。

「気にしないでいいよ。もう過去の話だから。それに今が大事だからね」

「そうだなー」

自分は千代美の嬉しそうな顔を見てホッとした。

そういえば2人の高校時代の事とか真剣に聞いたことないんだよな。

大まかな事は聞いたけど細かい事も聞いてないし、家族の事も聞いたことなかったな。

自己紹介と言うのをやったことないんだよな。

「それじゃあ今度は2人の事を聞きたいんだけど」

「いいぞ」

「かまわない」

「まずは私からだ！」

千代美から話始めた。

「まず私の母校、アンツイオ高校はとにかく貧乏だった。部活の部費は露店で稼いで何とかかしていたな。そして私が最後の夏の大会は2回戦で西住の妹に負けたな。悔しかったけどみんなと一緒に頑張れたからよかったな」

「そうだったのか・・・ん？」

「まほに妹がいたのか。」

「カルパッチョにペパロニ元気にしているかな」

「カルパッチョにペパロニ？」

「ああ！うちの高校はソウルネームで呼び合っていたんだ！カルパッチョとペパロニは私の後任を任せた優秀な後輩なんだ！」

「へえ〜そうなんだ。それよりもまほに妹がいたんだな」

「そうだ。西住みほ、私の居た黒森峰女学院には一年だけ一緒にいたんだ。今は茨城県にある県立大洗女子学園に在学している」

「一年だけとは？」

「私が二年生の時に全国大会決勝戦で発生した事故が原因だ。川に落ちた戦車の乗員を助ける為にフラッグ車を放棄したことが原因で我が校は10連勝を逃した。そのせいで非難の声を浴びせられ、母もみほに厳しい言葉をかけた。それが原因で転校することになった」

「どうして今も戦車道をやっているんだ？」

「新しい友達と共に自分の道を見つけたからだ。だけどあの時、みほに寄り添ってあげられなかったことを今でも後悔している」

「でも転校した先で出会った仲間はたぶんみほちゃんにもいい結果になったと思うからまほは気にしないでもいいんじゃない」

「そうか・・・佑真が言うならそうだな」

「そういえばもう夏だけど今年の2人の母校の組み合わせはどうなっているんだろうか？」

「全国大会って今年もあるんだろ？組み合わせはもう知っているのか？」

「あっ!？」

「むっ!？」

「この反応、完璧に忘れていましたね」

「今からスマホで調べるから待っておけよ」

「自分はスマホで検索して今年の全国高校戦車道大会の組み合わせを見せた。」

「黒森峰は知波単か」

「アンツイオ高校はBC自由学園だな!」

「今度見に行くか？」

「うん!」

「そうだな」

こうして全国戦車道大会を見に行くことになった。